

## 高月観音の里歴史民俗資料館

長浜を含む琵琶湖の北にある湖北地域は観音像（慈悲の菩薩）が多いことから「観音の里」と呼ばれています。この資料館には、約 30 体の仏像が展示されており、中には 1,000 年以上前のもものあります。戦争や災害下でも地元の仏教徒たちが隠したり保護したりしてきたおかげで、これらの観音像は破壊されることなく何世紀にもわたって生き延びてきました。

観音は菩薩、つまり仏の次の位にあつて悟りを目指す仏であり、さまざまな姿で人々の前に現れると言われています。湖北地域は、奈良や京の都、比叡山の天台寺院、日本海に面した北陸地方から流入するさまざまな仏教宗派の合流点に位置していたことから、多くの観音像が安置されました。こうした観音像は、独自の仏教彫像をもたらしました。観音信仰は 8 世紀以降に特に盛んになり、この地域には現在も多くの観音像が見られます。

しかし湖北の観音信仰は 14 世紀に衰退し始め、多くの仏像が移されたり、廃寺に放置されたりしました。その後、16 世紀になると、繰り返される武士間の戦いによって村は荒廃しましたが、街の人々は観音像を地中に隠したり、田畑や川底に埋めたりして、略奪や破壊から守りました。ここにある仏像の多くには、この歴史の中で受けた傷跡が残っています。

現在も、湖北地域とその周辺の寺院には観音像が祀られており、資料館には各寺院を掲載した地図も用意されています。博物館から最も近い渡岸寺観音堂には、国宝に指定された十一面観世音菩薩像が安置されています。

さらにこの資料館には、現在の長浜市高月町出身の儒学者・雨森芳洲（1668–1755）に関する資料も展示されています。芳洲は、対馬藩（現・長崎県対馬市）に仕え、朝鮮通信使の外交官としても活躍しました。芳洲が説いた「誠信外交」（誠意と信義による交流）の考え方は、現代の国際認識や多文化共生にも通じるものです。彼が残した朝鮮通信使に関する数多くの資料は「雨森芳洲関係資料」として重要文化財に指定され、2017 年にユネスコ「世界の記憶」に登録されました。